

答辞

皆様こんにちは。ご紹介にあずかりました、卒業生代表の三谷航大と申します。ご来賓、教職員、保護者の皆様、本日はお忙しいなか卒業式にご列席いただき、ありがとうございます。高校1年と2年の皆さんも貴重な休みの日にわざわざ参加してくれてありがとう。そして素晴らしい送辞をありがとう。

答辞というものはおそらく委員長経験者だったりする人が行うのが普通なのでしょうが、そうではない私が選ばれてしまったわけで、ダークホースみたいな感じなのですが、ダークのまま跳ねないで終わる可能性もあります。何卒よろしくお願いします。

さて、卒業するにあたり武蔵での6年間を振り返ってみると、やはり記憶のほとんどにコロナウイルスが何かしら関わっている気がします。中学2年の3学期、放送で期末試験の中止と臨時休校が伝えられ、そこかしこの教室から嬉々とした叫び声が聞こえたとき、これから様々な困難と犠牲が生じることに私たち生徒は誰も気付いていませんでした。数々の行事が延期・中止になり実施に至っても制限がかかり、多くの生徒がやり場のない気持ちを抱えたことと思います。失われた日々が戻ることは決してありませんが、今年に入ってから制限が解除され徐々にコロナ禍前の状態に戻りつつあり、こうして卒業式がほぼ従来の形で実施でき、門出を盛大に祝って頂けることには心から感謝しています。

突然当たり前が当たり前でなくなった激動の日々のなか、自分の周囲の環境について考えたことがありました。毎日帰る家があって、食事が用意され、温かい布団で寝る。学校には気心の知れた愉快的な友人がいて、質の高い教育を受けることができる。明日を生きるための食料を調達できるか、町で突然暴漢に襲われないか心配することはほとんどないでしょう。非常に安泰な生活であると言えます。しかし、その安泰に甘んじていると時間はいたずらに過ぎ去ってしまう、簡単に停滞してしまうのではないのでしょうか。あの仕事に就けば将来安泰だとか、年収何万円以上なら安泰だとか、安定志向が広がっていますが、安泰を求めすぎて逆に停滞していないのでしょうか。

私は正直なところ、武蔵での大半をぼんやりと過ごしてきました。毎日遅刻せずに学校に行き、授業を受け、部活に参加する、皆勤賞として祝われましたが自分の中では停滞していたように思います。ただ、せっかく二外を続けてきたのだからと成り行きで応募したフランスへの国外研修で未知の世界に触れたことが、大きな転機となりました。受験英語ばかり勉強していた私は、英語能力が科目の1つとしてマルかバツがつけられ点数によって評価されることに慣れていたため、初めてゼロから学んだ言語で話したことで、言語とはコミュニケーション手段であるということ深く再認識しました。帰国してからは言語観が変わり、二外の授業ではネイティブの先生との言語を介したコミュニケーションを大事

にするようになって、文法の正確さは大事ですが、それ以上に自分の考えていることが相手に伝わることに強く喜びを感じました。日々接する日本語も特有の表現や言葉の響きの唯一性に敏感になるなど、普段の生活に幅が生まれるのを実感しました。こうした意識が変わるきっかけは授業や部活、友人との他愛のないおしゃべりなど色んな所に溢れていて、それは一瞬にして大きな変化を起こすのでしょうか。こうしたきっかけを大切にしてほしい、逃さないように視野を広くもってほしいのです。また、私は持ち前の怠惰さによって、色々な物事に手を出しては中途半端で終わることがほとんどでしたが、在校生の皆さんには残りの武蔵生活で自分が没頭できることをやり切ってほしいと思います。武蔵という世間的には変わったこと、98期で言えばチョコレートクッキーでしょうか、そういうことをしても受け入れられる、ある種の寛容さ、それが浸透している空間は当たり前ではありません。高校生活は大学に行くための単なる通過点ではないです。あっという間に過ぎ去る高校生活を、無為に過ごして停滞することなく、価値あるものにしてほしいと思います。

最後になりますが、6年間ずっと支えてくださった保護者の皆様、ご指導してくださった先生方、苦楽を共にした同級生たちに感謝の意を表し、そして武蔵高校中学校のますますの発展を祈念して、私の答辞とさせていただきます。

令和6年3月18日
卒業生代表 三谷航大